私が動的分類についての疑問をお尋ねすると先生はドイツ植物学会発表の抜刷,「植物の動的分類体系について」を取出され興奮の色を顔にうかべて熱心に説明された。「AとBの二種があるとAの中にはBの性質もある。しかし概してAの性質が多いのである。一見して黄と赤というも両者ともに黄と赤の部分がありその量の相違にすぎない。早田と木村というも早田の中には木村の性質もあり木村の中には早田の性質もある」と。

また「我々はその生存する土地を利用するのである。私が日本に生れてこなかつたら,また台湾が日本のものとならなかつたら私が *Taiwania* を発見することもなかつたし,また *Protomarattia* を発見することもなかつた。牧野さんとて日本に生れたからこそ多くの植物の新発見もできたのだ。ダーウインは英国に生れたから系統学をのべ,私はそれと全く相対した東の端,日本に生れたから因子分配説を述べ得るのだ。西洋の真似だけでは何もならない。我々は我々の地を利用すべきだ」と。

「私は述べるにはまだ早いが,あることに気がついた。誰もがみていながら気がつかないということがある。海藻の *Laminaria* の遊走子を海にまくとコンブがスルスルとできると人がみんな思いこれをみてきたが,仏人のソーヴァジョーがその間に Oogoinum と Spematozoid ができそれから Zygote ができる一つの段階を発見するまで人は知らなかつた。そのようなことに私は気がついた。」と。

先生も御疲れのようだしまたこれから仕事をつづけられるようすなのでおいとまする。私の辞退にかかわらず病身を玄関まで見送つて下さつた。「暑い中をわざわざ尋ねて下さつて」といわれた。私はそれから植物園を散歩しつつ,大学の教授,早田先生とつぶやきながら何か悲壮な感じがした。教室ではこの暑いのに教授や研究者は皆せつせと仕事をしていた。早田教授も床の中で筆を走らせておられるのだろうと想像した。

(昭和8年7月13日記)

□中井先生から聞いた早田先生の思い出

昭和8年5月4日中井猛之進先生をおたずねしたとき早田文蔵先生についての御話に「自分が学生の頃大学でがんばって勉強していたのは早田さん,柴田(桂太)さんと自分であった。早田さんは徹底的に努力の人で,あらかじめ一年間の仕事の計画をたて,また毎日する仕事をあらかじめきめて無理をしても仕事を終えられた」「自分は昔,蘚類を押入れ一ぱいに標本を集めたが松村先生にそれではめしが食えぬと叱られてやめた。早田さんは苔類を研究されたが松村先生にやめさせられた。それで自分は朝鮮植物,早田さんは台湾植物でめしを食いつつ勉強できた。」「早田さんは篤信家で立派な人であったが脚気にかかって死ぬばかりであった。それで魔がさしたのか一時,自分につらくあたられたが,今度の病気以来また立派な心にたちかえられ,遂に亡くなられた。早田さんを知るのは自分が一番であり,早田さんの死が惜しまれてならない」。(木村陽二郎)